

海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	石川 史織
所属機関	東北大学大学院医学系研究科 臨床腫瘍学分野
<ul style="list-style-type: none"> ・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	欧州臨床腫瘍学会 2025 (European Society for Medical Oncology (ESMO) Congress 2025)
渡航期間	自 2025年10月16日 至 2025年10月22日
<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容 ・国際学会・会議内容 	表題：Impact of <i>TP53</i> Gain-of-Function Mutations on Clinical Outcomes of BRAF-Targeted Therapy in Pretreated Colorectal Cancer セッション：Poster session
<p>研究成果（要約：800字）</p> <p>このたびは、公益財団法人がん研究振興財団「令和7年度海外派遣研究助成」事業のご支援を賜り、令和7年10月にベルリンで開催された ESMO2025 に参加する貴重な機会をいただき、心より御礼申し上げます。本助成により、最新の国際的ながん研究の動向に直接触れるとともに、自身の研究成果を世界に向けて発信することができ、大変有意義な経験となりました。</p> <p>私が発表した研究は、<i>BRAF</i>V600E 変異を有する大腸癌（CRC）における最適な BRAF 標的治療の選択に資するバイオマーカー探索に関するものです。現在、海外ではセツキシマブとエンコラフェニブによる2剤併用療法が標準治療とされていますが、本邦ではビニメチニブを加えた3剤併用療法も使用可能です。しかし、どの患者にどちらの治療がより適しているかについて明確な指標は確立されていません。そこで本研究では、<i>TP53</i> 遺伝子のサブタイプに注目し、がんゲノム情報管理センター（C-CAT）のデータベースを用いて、<i>BRAF</i> V600E 変異を持つ大腸癌患者 309 例を対象に解析を行いました。</p> <p>その結果、2剤併用療法を受けた患者群では、<i>TP53</i> gain of function (GOF) 変異を有する患者の治療成功期間（TTF）が、非 GOF 変異群と比較して有意に短いことが示されました。一方、3剤併用療法では GOF 変異と非 GOF 変異の間に TTF および全生存期間（OS）の有意差は認められず、傾向スコアマッチング解析でも同様の傾向が確認されました。これにより、<i>TP53</i> GOF 変異を有する患者においては3剤併用療法が治療成績を改善する可能性が示唆され、<i>TP53</i> サブタイプが BRAF 標的治療選択の有望なバイオマーカーとなり得ることが明らかとなりました。</p> <p>本研究成果を国際学会という場で報告できたことは大変光栄であり、今後は基礎的検討も加え、論文として公表することを目指して研究を深化させていく所存です。このような貴重な学びと発表の機会をいただけたのは、本助成制度によるご支援の賜物であり、改めて深く感謝申し上げます。</p>	

